

## 五感のヒエラルキーについて

繁田 歩(東京工業大学、学振PD)

本発表の目標は、近代哲学における「五感のヒエラルキー」に関する様々な思想の潮流を、18世紀の哲学者イマヌエル・カントを主な参照の結節点として再検討することである。その結果として目指されるのは、次の二つのことである。第一に、カントの五感論がどのような思想史的素地のもとにあるかを明らかにすること。そして第二に、視覚優位説の代表的な思想家として理解されるカント哲学に、より繊細な理解を与えることで現行の解釈に若干なりとも修正を与えること、である。

『純粋理性批判』(1781/87)をはじめとするカントの理論哲学において、われわれ人間にとって有意味な知識をもたらす認識の構成に際して、感性と悟性という種的に異なった認識源泉が統一された意識のもとで協働することが不可欠であることが主張されている。一方で、『純粋理性批判』の大部分においてカントは悟性の有する純粋な概念(カテゴリー)とその使用における客観的妥当性ならびに、総合判断などといった議論を論じている。これに対して、認識を形成するもう一方の要素を与える感性については「われわれが対象によって触発されるしかたをつづじて、表象をうけとる能力(受容性)」(A19/B33)といふかなり大雑把な説明が与えられるのみである。

もっとも、同書でカントは感性にはいわゆる心の変容の知覚である内的感覚を受容する「内官」と、外的感覚を受容する「外官」との二種があり、前者の純粋形式が「時間」であり後者のそれは「空間」であるという重要な区分を提示している。しかし、そのような議論において若干なりとも感性の内実が彫琢されているということに認めるにせよ、カントが批判哲学において「感性」そのものについて、悟性や理性と同等の繊細さをもった分析を与えることに成功しているとはいえないのが事実である。

このような現状を踏まえて、発表者が注目したいのが、カントが長年にわたる講義の集大成として取りまとめた、『実用的見地における人間学』1795年(以下、『人間学』)である。その理由は主に二つある。第一に、この著作のうちで認識能力全般を論じた第一篇(全体で五九節に及ぶ)のうち、感性の説明は第七節から第二七節にあてられており、悟性や判断力に関連する箇所と比しても十分な注目度を集めているといえるからである。

また第二に、カントはこの『人間学』における感性論において、外官を「五感」つまり、聴覚、視覚、触覚、嗅覚、味覚という五種類に分類したうえで、それぞれの特質ならびにそれを喪失した場合の感性全体の働きについて言及している。このように、『純粋理性批判』のような純粋でア・プリオリな認識の可能性を論じた著作とは異なり、経験的で心理学的な側面にも及ぶ認識の諸相を論じた『人間学』では感性という認識能力が特別な重要性を持つようになっていると考えられるのである。

しかし、今日までに与えられてきた感性論・身体論に関する哲学的先行研究では、カントにおける五感のヒエラルキーは強固な視覚優位説に傾いており、当時の近代思想史の文脈からみても、当時の主流の見解を繰り返しているだけであって独自性の低い議論だと理解されてきた。このような指摘を正当に評価するためにも、今回の発表ではカント以前あるいは同時代の思想家が提示していた五感論の類型として、視覚優位説、聴覚優位説、そして触覚優位説という三つの考え方に言及することで、議論を

深めたい。

五感のヒエラルキーについて流布している思想のひとつが、聴覚優位説から近代の視覚優位説への転回という言説である。この説は、代表的にはロラン・バルトによって提示された初期近代哲学観に端を発している。彼の見立てでは、聴覚優位の時代であった中世の思想が、イグナティウス・ロヨラを契機として初期近代になると逆転したのだという。もっとも、ブルーメンベルクのように、聴覚と視覚とのせめぎ合いの歴史を動的で継続的な対立構造とみなす立場もあり、議論は単純ではない。しかし、近代哲学を支える実験観察という視覚的な洞察の重視、そしてその重要な一例として提示されたモリヌクス問題などといった議論の系譜は、近代哲学において視覚が優位を占めていたと考えるに十分な理由を与えているであろう。

この議論をさらに複雑にするのが、18世紀の思想家にとって触覚もまた独自の重要性を認められていたという事実である。つまり、五感論においては聴覚優位説、視覚優位説、そして触覚優位説が混在する事態もあり得たのだ。触覚優位説を提示した代表的な思想としては、例えば、ルソーの『エミール』1762年、そしてヘルダーの『彫塑論』1778年などに目を向けるべきであろう。特にヘルダーは学生時代にカントの授業にも出席していたことが確認されており、ヘルダーとカントを対比することはカントの生きた時代にどのような五感論の潮流があったかを理解するうえで重要と言えるであろう。

もっとも、カントが行った人間学の講義はバウムガルテンの『形而上学』1757年(第四版)の心理学部門を下敷きにしたものであり、部分的にはそこに典拠を求める必要もあるだろう。あるいは、近代ヨーロッパの感性論を理解する上ではコンディヤックの『感覚論』1754年にも目を向ける必要があるかもしれない。なお、カントの著作にはコンディヤックへの言及は確認できないが、ヘルダーの思想形成においてイギリスとフランスの感覚論的経験論者の先行研究が重要な起点となったことは疑いようもない事実である。

以上のように、18世紀の五感論を取り巻く思想的な文脈は多岐にわたるため、そのすべてを一度に論じきることは不可能であり、不可避免的に今回の議論の視野も制約されるであろう。いずれにせよ、本発表の目標は、カントの感性論は必ずしも視覚優位説だけに傾いてはいなかったという読解を提示することである。特に筆者は、そのことの具体的な典拠として、「感官能力の喪失」いわゆる知覚障害についてのカントの言及に着眼する。なお、視覚障害についてのカントの言及を理解するためにも、当時の視覚障害論において注目的となっていたディドロの『盲人書簡』1748年にも必要な範囲で言及する。

以上の観点を考察することで、本発表ではカントの『人間学』における五感のヒエラルキーに関する議論が、先行研究のいうように視覚優位説に傾倒したものであるのかを再検討するとともに、カントの五感論に流れこんだいくつもの異なった思想家の影響を特定し、最終的にはカントの感性論についての現在の理解をより充実したものとすることを目指す。